

DIE
LEGENDEN
VON
ANDOR
アンドールの伝説

ペーター・グスタフ・バートシャット 作
ワタリガラスの決断：前篇



ふたりの男が〈南ヶ丘の森〉を東へ抜けようとしていた。素早く、音もなく、まるで熟練の野伏であった。目立たない茶と緑に身を包んでいる。年長者は、ぴっちりした半^{ズボン}洋袴をひざ下で締め、ダブレットとベストを着こんでいる。鬱蒼とした森を移動することを常とするアンドール人である。若い方は綺麗に髪をなでつけ、同色のストライプのチュニックを着こんでいる。

ちょっと見れば、ふたりがよく似ているのは明白だ。父と子が共に旅をしているのである。父ファンと息子フェンの名は、リートラントの南のナルネ河沿いでは少しは知られている。

ファンの長い二股の顎髭は、灰色の髪とともに、風雨で鍛えられた顔を縁取っている。〈鉤爪の岩場〉を超えて遠く南まで隊商の護衛をしたことで名を馳せていた。息子のフェンだが、赤っぽい髭は顎を覆ってはいたが短く、本人が希望するほどは密生していないが、その若さにもかかわらず追跡者としてひっぱりだこだった。熊やスクラルの襲撃者が農場や村の安全を脅かすとき、急遽編成された狩人部隊と行動を共にした。こういった危険な敵の狩行によって、フェンは人間に見捨てられた原野の境界にまでやってくるがあった。

何度も何度も、ファンは不審げに空を見上げた。一羽のワタリガラスが、不規則にふたりの上空に現れては何回か旋回し、また消えるのだ。

「お前はあの鳥が誰のものか知っておるのではないか」ファンが意地悪く言った。

フェンはあつけらかんとした顔で、何の疑いも持たずに返した。「知らないなあ」父以外だったら信じたことだろう。

「間抜けな振りはやめろ、フェン。あの鳥の名は？ ヤーコブか？」

「惜しい、モラーだよ」

「なるほど。で、モラーはどこに……さほど遠くではあるまい。そうとも、お前は知っている。お前から目も手も放さぬ、あの金髪女のところだろう。名は何と言った？」

「ネヤだよ」フェンはしぶしぶ白状した。「これで気が済んだろ。話題を変えようぜ」

実際のところ、フェンも父と同じ考えだった。あのワタリガラスが本当にモラーなら、ここに来る理由の一つ。御主人たる嫉妬深いネヤが、フェンを追わせたのだ。ネヤとワタリガラスの間には極めて特別な関係があるのだが、さっきまでのフェンのように明かしたがいなかったため、それが実際どういうものなのかは判然としない。ネヤは時に、見たはずのないことを微に入り細に入り知っていた。だが例のカラスならそれを見ていたのだ。それはつまり、フェンから目を離さないようにカラスを放ち、ネヤはその後を追って来ている、ということの意味している。そしてそれは……そこでフェンは、その先を考えるのをやめることにした。ろくな結末になど、ならない。

どこか北のほうから角笛が響いてきた。息子の問いに答えようとしていたファンは、思わず口をつぐんだ。不運にもそのせいで、フェンの思考は実際にそこで止まった。ネヤが追って来ているとするなら、ここで自分が足止めすれば、父親を待ち合わせ場所まで先に行かせることができる。

だが、それはうまい考えだろうか？ 先ほど怖気がふるったように、きつとろくな結末にはならないのだ。

父親と息子は北に向かった。森の縁をたどり、それでも木々の深い陰のなかから踏み出さず、付近の通商路に行く旅人から見られても気づかれないよう注意した。

ついに広場に到達した。四頭立ての重厚な牛車に牽かれた、あらゆる種類の交易品を満載した荷車がある。御者はファンと同じように顎髭を整え、すつくと御者台に立ち、再び角笛を吹こうとしていた。けれどふたりに目にするると手を止め、林床へと跳び降りた。

「ファン、旧友よ。いつもどおり時間に正確だな！」男は叫んだ。「しかし、お前さんの息子、去年に比べてだいたい背が伸びたじゃねえか。髭なんか生やして、もう坊主なんて呼べねえな。立派な男だ」

「ナデル、相変わらずおしゃべりな野郎だ」ファンが返した。「しかも、去年と全く同じセリフだぞ」言いながら、ふたりの猛者は抱き合った。

フェンは、どちらからもハグされなかったことを喜んだ。前にそうされたときには、締め付けられて息ができなくなった。

「クラー！」上空からワタリガラスが叫んだ。優雅に方向転換すると、風に乗って消えて行った。フェンは眉をひそめた。

ふたりの壮年は、もう充分だとばかりに体を離れた。「故郷^{くに}から何か便りは？」ファンが訊ねた。

「ああ、いつものごとくさ。お前さんの二番目のかみさんのテラは、もうひとり坊主を生んだぜ。奇跡だつて、言ったやつもいた。なにせお前さん、何年も帰ってないんだからな。口さがないヤツらなんぞ……」

「言わせておけ、ナデル。別に知りたくもない。南で何か問題はあったか？」

「ああ、またもや一大決戦だ。巨人とガイコツ剣士を追っ払ってやった」ナデルは唾を吐いた。「とはいえ、巨人がガイコツを造る速度にゃ、女どもが息子を生む速度も勝てやしねえ。おおっぴらにゃ言えねえが、みんなひそひそ言ってる。今じゃ、オレたちのガイコツと戦わなきゃならねえってな。もう時間はねえんだ、ファン！ 来年か遅くとも再来年になりゃ、アンドールまで大遠征しなきゃならねえ。ステップの故郷を失うことになる。とはいえ、あそこも攻めやすいからな。その後なら、何世代か平和に暮らしていけるだろうよ」

「そんなに簡単にはいかない」ファンが反論した。「前に何度も言ったはずだ。アンドール周辺には何人も勇敢な戦士がいる。ここでも戦があった。人間とドワーフが背と背を合わせて共闘していた」

ファンは担いできた袋を開け、書類入れを取り出してナデルに手渡した。

「人間とドワーフが背と背を合わせてだって？」ナデルはオウム返しをした。「この国で^{ミード}蜂蜜酒なんて呼ばれてる、あの薄い泥水なんざ、飲めたもんじゃねえってのに！ まあいいさ、お前さんは一体全体、何を持って来たんだ？」

ナデルが包みを開けると、色々と書きつけられた羊皮紙が何枚か出てきた。広げてみる。

「リートブルク城だ」ファンが言った。「去年の秋、俺は追跡者として、王子ソラルドの斥候隊に徴用された。王子は、とあるスクラルを追っていた。素面に戻って王子がひとりで鞍に跨がれるまで、何日かかかった。だから、城の防備を見て回る時間は充分にあったのさ」

ふたりの猛者とフェンは、ファンが描いた壁と塔の構造をしげしげと眺めた。城の衛兵の弓矢が届かない死角には、印がつけてあった。

三人ともあまりに夢中で図面を眺めていたため、^{フロンド}金髪の若い娘がしっかりした足取りで、すぐ近くまで来るまで気づかなかった。

「何をなさっておいでなのかしら？」女はそう訊ねた。

ナデルは急いで羊皮紙を丸め、包みに戻し、右の脇下に仕舞いこんだ。何でもないような顔を装った。

フェンは天を仰ぎ、ネヤにこの密談を邪魔させないようにできたはずなのに、自分を呪った。そして、アンドール攻めを画策するふたりを、衝動的に邪魔したネヤを呪った。

「まあ、こいつは、驚きだね！」フェンは声を荒らげた。「偶然ここを通りかかったっていう寸法か！ 家に帰る途中なら、急いで帰るんだね」

「ここでどんな密談を？」ネヤも反撥的だった。「許婚が、父親とひそひそ話をしてるの、気づかないとでも思ったのかしら？ 背後には他の女がいるんでしょ！」ネヤは辺りをじろじろ眺めた。

「親父と狩りに行くぐらい問題ないだろ」フェンが答えた。「急がないと、夕暮れまで家に戻れないぞ」

視界の端で、父親が偶然を装ってベストの内側に手を滑らせたのを、フェンは確認した。ナイフを隠してある場所だった。

フェンはネヤの腕に自分の腕をからめた。「おいで、愛しのネヤ。一緒に家まで戻ろう。親父と、その…叔父さんは、まだ話があるんだそうだ。聞いてたってつまらないよ」

ネヤはねじって腕を外した。「わたしがばかだとも思ってるでしょ？ ここで秘密の話をしてるのは知ってるわ。わたしはただ、その内容が知りたいだけ！」

すると、フェンの脳裏に素晴らしい天啓が下りた。少なくともフェンにはそう思えた。

「ネヤ」フェンは言い渋った。「本当に知らせたくはなかった……親父とぼくは、きみへの婚約祝いに何を買おうか相談していたのさ。あそこで、交易商に頼んでいたところなんだ。でも、もう知っちゃったから……驚かせることはできなくなったなあ」

ネヤは体を寄せ、フェンの胸にすりすり頭をこすりつけた。「驚かされるのは好き」甘え声。「それって何？ ねえ、教えてよ！」

「それは……いや、さすがに言えないよ。そのぐらいは驚かさせてくれよ！」

「わかったわ。ほんとはそういうのいないけど」ネヤは振り向いて歩き出す。「でも、せっかくだからもらっておいてあげる。別に高くなくていいのよ！」

フェンは、救われた想いの溜息を押し殺した。これで万事うまくいった。これで誰も、ネヤを殺さなくてはならないとは思わないだろう。あとはナデルの荷車から、それっぽい贈り物を見繕えばいいだけだ。

そのとき、手が届きそうだったハッピー・エンディングが不意になった。ワタリガラスのモラーが、すぐ近くで再び周回したかと思うと、ネヤのほうへ向かった。地面に落ちんがばかりに急降下すると、男たちと女主人の間を飛んだ。

ナデルは、反射的に右腕で顔を覆った。書類入れが林床に落ち、開き、凶面が転がり出た。

「もう充分だろ」フェンはそう言って、ナデルとネヤの間に割って入った。

「ちょっと待って！」ネヤががなり立てた。「リートブルク城の凶面じゃない。丸をつけているところは何？ 死角ってどういうこと？」

ネヤは寝かされ、足と一緒に後ろ手に縛り上げられ、不快な緊張を強いられていた。根と草が口につき、服で猿轡をされている。

フェンの止める間もあらばこそ、ファンとナデルは電光石火で動いていた。ネヤは何も考える間もなく、圧倒され、縛られ、大地に転がされていた。

そんな体勢でも、ネヤは恐れるというよりは怒っていた……この時フェンは、初めて彼女の性根が分かった気がした。フェンは初めに父親を、それからナデルを睨んだ。ふたりとも睨み返してきた。

「こんな厄介事、感謝するとでも思ったか、坊主？」ナデルが問いかけてきた。

「いや、ぼくにはどうしたらいいか……」フェンが口ごもる。

「ああ、どうもできない。もう充分わかった！」ファンが指を鳴らした。「さあ、片付けろ」

「ああ、わかってるよ」フェンが熱心に言った。「牛車が行ったら、一時間ほど待つ。それから縄をほどいて、言わないって誓いを立てさせる」

「ファン、ずいぶんと軟弱に育て上げたもんだな」ナデルが唸った。

ファンは息子を平手打ちした。フェンは立ったまま凍りついた。ファンはベルトからナイフを抜き、息子に持たせて言った。「おまえは好むと好まざるとにかかわらず、我が一族だ。自分の刃でやれぬというなら、これを使うがいい。首尾よく仕留められるだろう。それから森の奥へと引きずって埋めるんだ。なんといっても、これはおまえのせいだ。この女が、おまえを追ってきたのだから」

猿轡にもかかわらず、ネヤははっきりと、侮蔑とわかるのうめきを発した。

「それは、ぼくに他の女がいると思ったから」フェン「でも、実際にはいなかったって、ネヤもわかったんだから……」

父親は、さらに引っぱたいてフェンを黙らせた。

「殺せ！」ファンは命じた。「すぐにだ！ できないなら——ステップの四つの風にかけて——この俺がお前ら両方を殺して、一緒に森の中に埋めてやる！」

そのはるか上空で、モラーは再び円を描き、憐れむように一鳴きした。

果たしてフェンは、父の命に従いネヤを殺めるのか？

それとも抵抗して自らの命でその代償を払うのか？

続きは次週のお楽しみに……

※フェンは四人の『新たなる勇者』のうちのひとりです：

